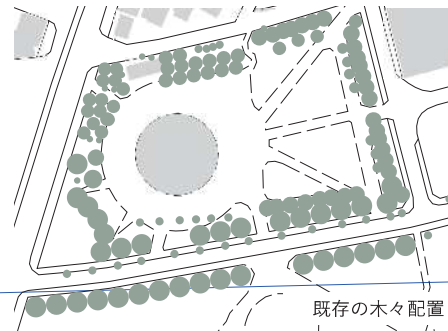


開かれた森には人が集まる

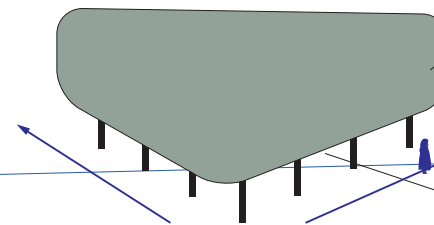


開かれた森をつくる

立派な街路樹は都市の魅力になる力があると考えます。しかし、現状では暗く閉ざされたイメージとなってしまっています。私たちは木々を移植、再整備することで、新たな風景を提案します。木々が集まり、開かれた森が生まれるのです。森を中心に、もう一度富山の都市構成を考え直します。現在、富山駅エリア、総曲輪エリアの商業エリアがそれぞれ中心となり、富山のまちが二つに分かれてしまっています。開かれた森が新たな中心になり、富山が一体となります。



既存の木々は、まちに対して境界となっています。人の流れを作るように街路樹を再配置します。いくつかの三角形や四角形の小さな森が生まれます。



木を集めることでボリュームができます。遠くからの視認性もあがり、まちの新しいアイコンになります。

街路樹とは別の軸が生まれ、歩行者を森の先の広場へと誘導します。街路樹が都市の境界から、都市をつなぐ役割に変わります。

森の下端の枝を同じ高さに切り揃えることで、空間ができます。幹が柱になり、枝葉が軽やかで明るい屋根になります。

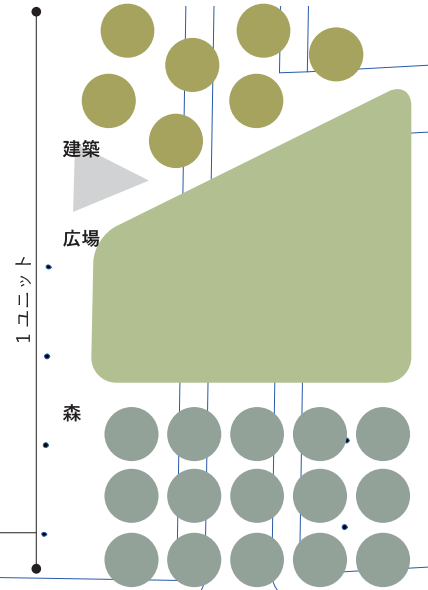
森と広場のユニット

ボリュームをもった森が複数点在します。森で切り抜かれた空間は芝生広場として使われます。アイレベルでは森の下の空間と広場は一体となって見え、開けた印象を与えます。森の下は大屋根（枝葉）と柱（幹）を持った空間です。木陰で本を読んだり、木々の隙間から空を見上げたり、まちの中で自然を感じることができる場所です。芝生広場は寝転んだり、ボール遊びをしたり、開けた空間を生かしたアクティビティの場となります。

森と広場は1つのユニットとして扱います。もともとの広い敷地を森によって区分けすることで、さまざまな規模で市民や民間事業者が場所を貸し出し利用してもらいます。

PPP、PFIなどでは、1ユニット単位から行えます。

森に沿って建築をすることで、森、広場の両方に開かれた建築ができます。



シームレスな歩行体験

豊富な街路樹をデザインに生かします。既存の街路樹と一体となるように木を配置し、森をつくることによって、広場に人をシームレスに誘導できると考えます。並木に沿って歩いたり、森の中を歩いたり、豊かで楽しい歩行体験をつくります。

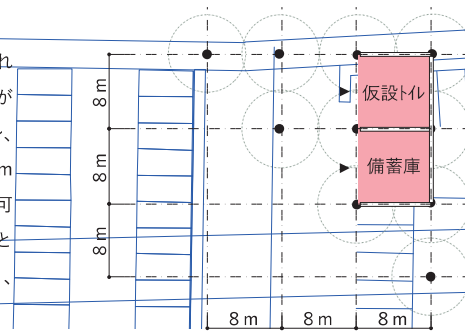
歩車分離だけでなく、ついつい歩いてしまいたくなるような風景を目指します。ウォークブルなまちづくりをより加速させたいと考えています。

既存の歩道から広場に向けて歩行者を誘導します。

既存の歩道

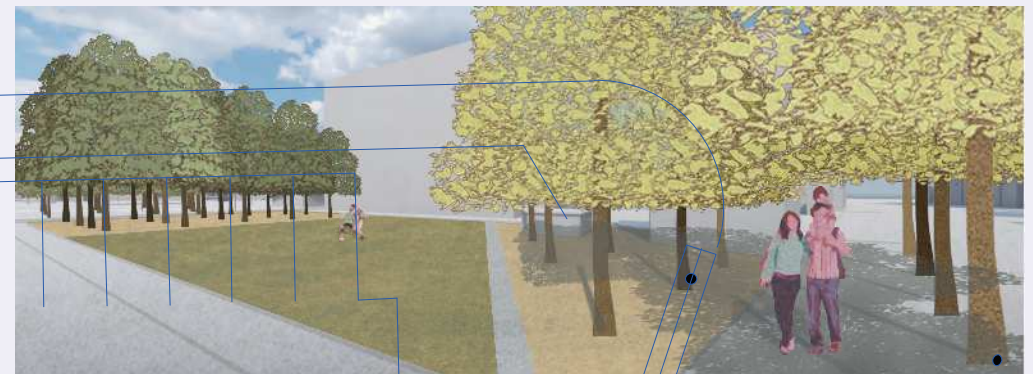
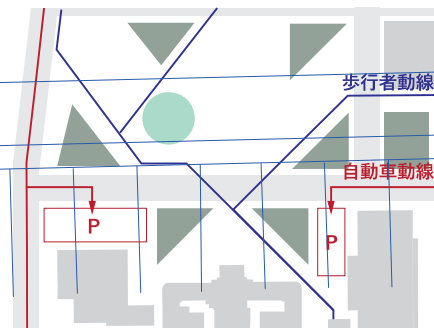
グリッドが作る活動拠点

森は約8m四方のグリッドに配置された木々によって作られます。木の幹とグリッドを支えに、簡単に空間を作ることができます。例えば、災害時には、シェルターや仮設トイレ、備品庫などを簡易的に建設することができます。他にも8m四方を区画として、市民に占有的な使用を許可することも可能です。マルシェや屋台営業など、市民活動の寄りかかりとなります。また、森の中には電源を含めたインフラを作り、市民活動、災害活動を助けます。



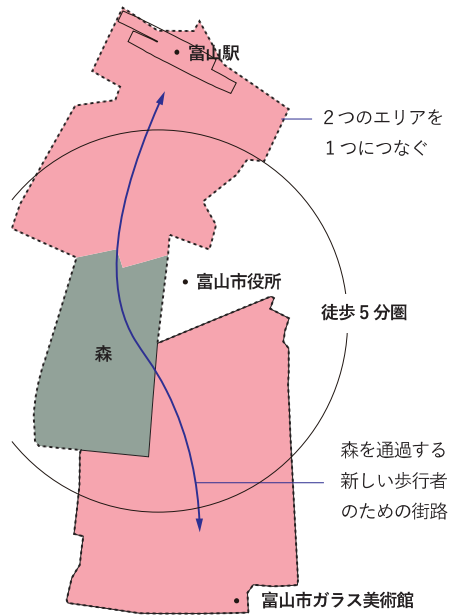
美しさと安全性の両立

県庁前の道路は自動車の往来が多く、歩行者にとってあまりよくない環境です。とはいえ県庁という特性を踏まえ、駐車場は十分に確保したいと考えます。森の組み合わせが駐車場を形づくり。森が車路と歩道を分け、歩車分離を進めます。また、まちでは駐車場が多く目立ちます。とくに県庁の前では車が乱雑に停めてありました。これは風景にも悪影響を与えています。私たちの提案は、風景にも溶け込み、歴史ある県庁をさらに美しく見せるでしょう。



森を中心としたコンパクトな富山

大きな森が富山のまちの中心に生まれます。対象敷地である県庁前は、主要なオフィス街・商店街・文化施設から徒歩 10 分以内とすばらしい立地でありながら、現在は県庁に目的がなければ路面電車とバスにより、富山駅前エリアと総曲輪エリアに跨がれてしまい、あまり人が訪れない場所です。本整備では森が 2 つのエリアを繋ぐことで、1 つの「富山」を作ります。



森は人を惹きつける

森は多様な場を作る土台となります。

